

# 史

## 町衆、商人が生み出した人間賛歌 長浜曳山まつり

全国的にも名の知られた湖北の春を彩る華やかな長浜曳山まつり。長い歴史を持つこのおまつりには、「水」とともに栄えた長浜の成り立ちや、そこで暮らした人々の大いなる力や心意気が秘められています。曳山まつりの「意外に知られていない一面」を市立長浜城歴史博物館学芸員の中島誠一さんにおうかがいしました。



長浜曳山まつりで使われる扇と見物に使われる時短の弁当箱

### 曳山まつりのルーツは？

長浜城主だった秀吉に男子が生まれ、喜んだ秀吉から祝いの砂金を贈られた町衆がお礼の意味で始めたのが曳山まつりだとされています。しかし、これは史実というより伝承というべきと中島さんは言います。では、曳山まつりの本当の由来は何なのでしょう。

「実はこの時期の秀吉に子供がいたかどうかさえ定かではないのです。この伝説は後日作り出されたものだ、私は思っています。曳山まつりは長浜八幡宮のまつりですが、秀吉が城主となり、この地域が長浜と呼ばれる以前、長浜八幡宮が坂田八幡宮と呼ばれていた頃から、曳山まつりの起源と思われるものはあったようです。日本のまつりは本来、農耕のまつりをはじめ、山に生きる人々には山のまつり、海に生きる人々には海のまつりといったように、自然の恵みや四季の移り変わりとともに生きる人々が、「悪霊退散（疫病や災害を鎮める）」や「五穀豊穡」を祈願したものです。曳山まつりのルーツがどのようなものだったかは不明ですが、元来は自然信仰の性格を色濃くもったと素朴なまつりだったと思われる。秀吉時代にまつりが始まったとされるのは、それ以前のものとは趣が大きく異なる現在の曳山まつりの原型がこのときに生まれたとされているからです。」

### 長浜の繁栄とともに、町衆みんなのまつりに

「曳山まつりは、古く由緒あるまつりにもかかわらず、宗教的な色彩が案外うすいまつりなんです。当時、都市にまん延する流行病は、恨みをなして死んだ人々によるもの（御霊信仰）と考えられていました。この悪霊をはらうために行なわれたのが、曳山まつりとよく似た京都の祇園まつりや博多の祇園」

「実りが多くて農民が豊かになれば町でモノを買ってくれ、商人たちも繁栄する」との商人の視点があるのではないのでしょうか。」

### 平和な時代に花開いた鉄砲づくりの技

「曳山まつりには商人だけでなく多くの職人も参加しています。たとえば曳山の鋳り金具を作った金工師を例にあげれば、代表的な金工師の流れには、長浜の「国友鉄砲鍛冶」と草津の「奥村喜次」の2つの系統がありました。平和な時代になると、それまで鉄砲を作っていた鉄砲鍛冶たちの仕事が減りました。彼らは彼らは仏壇の鋳り金具や刀のつばなどを作るようになり、特に前者は長浜仏壇として長浜の名産品となったわけですね。彼らはその技を生かして、曳山まつりの鋳り金具を作り出した。レベルは極めて高く、例えば、前出の壽山の昇降龍の金具は一つ作るのに23年もかけた逸品です。彼らは自らの技の集大成を提供することで、自らもまつりを楽しんでいたのではないのでしょうか。」



長浜やその周辺に暮らす人々、商人や職人、さらには農民や漁民みんなが、まさに現世を楽しく謳歌しているかのような当時の生きざま。曳山まつりの心には、今日の私たちの暮らしや価値観と合い通じる時代の先見性があるようです。



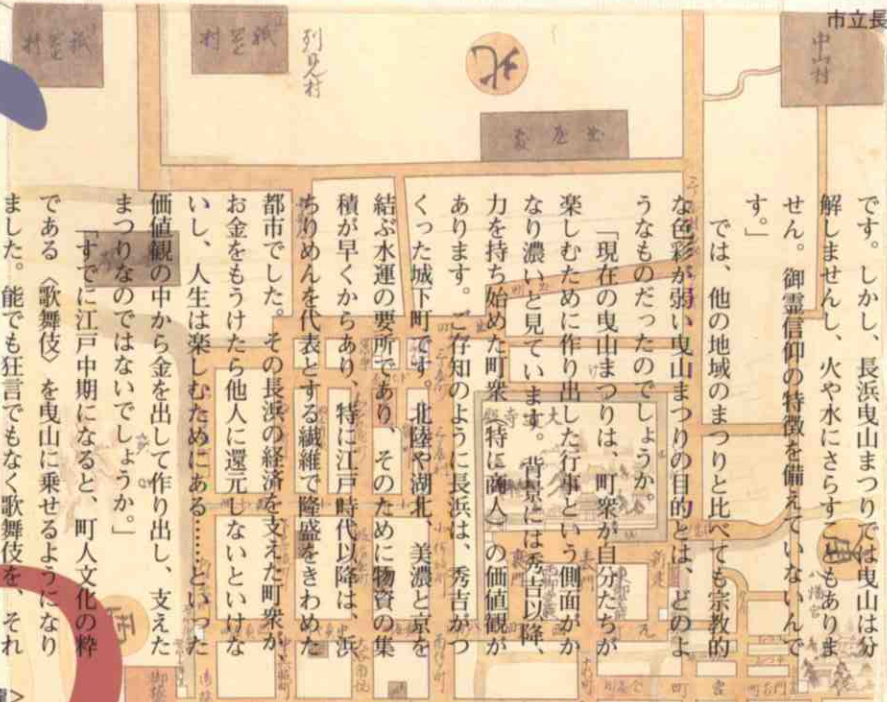
市立長浜城歴史博物館学芸員 中島誠一さん

### 市立長浜城歴史博物館

〒526-0065 長浜市公園町10番10号  
TEL.0749-63-4611 FAX.0749-63-4613

●開館時間：午前9時～午後5時（入館受付は4時30分まで）  
●休館日：月曜/毎月最終火曜（祝日は除く）/祝日の翌日  
\*2月、4月、8月は無休

# まよ



山笠です。悪霊は空中を漂っていると思われるので、高き鉾に上り、これを囃子で浮かれさせて、回した後、山車を分解して燃やしたり（祇園まつり）、海に捨てて（祇園山笠）、悪霊や疫病を消滅させるのです。火や水による清めです。しかし、長浜曳山まつりでは曳山は分解しませんし、火や水にさらすこともありません。御霊信仰の特徴を備えていないんです。」

では、他の地域のまつりと比べても宗教的な色彩が弱い曳山まつりの目的とは、どのようなものだったのでしょうか。  
「現在の曳山まつりは、町衆が自分たちが楽しむために作り出した行事という側面がかなり濃いと見えます。背景には秀吉以降、力を持ち始めた町衆、特に商人の価値観があります。ご存知のように長浜は、秀吉がつくった城下町です。北陸や湖北、美濃と京を結ぶ水運の要所であり、そのために物資の集積が早くからあり、特に江戸時代以降は、浜ちめめんと代表とする織維で隆盛をきわめた都市でした。その長浜の経済を支えた町衆がお金をもうけたら他人に還元しないといけません。人生は楽しむためにある……といった価値観の中から金を出して作り出し、支えたまつりなのではないでしょうか。」  
「すでに江戸中期になると、町人文化の粋である『歌舞伎』を曳山に乗せるようになり、また、能でも狂言でもなく歌舞伎を、それも子供が演じる形で乗せたんです。当時としてはあっと驚くアイデアだったと思います。これはまさに町衆の発想です。子供歌舞伎は一応『奉納芸』の形をとっていますが、自分たちが楽しむためだったのは容易に想像がつきます。当時のまつりを楽しむ様子や象徴するものが残っています。たとえば豪華な弁当箱と酒器がそれです。まつり当日はこれ



壽山の前柱<昇降龍>



中島さんは言います。曳山（ことぶきやま）の前柱を見てください。ここに「昇降龍」の意匠の鋳り金具がついています。昇降龍は雨を呼ぶもの、つまり五穀豊穡を祈念したものであるのは確かです。また「狸々丸（しやうじやうまる）」は、曳山全体が船の形をしていて、水神をまつったものだと思いますが、これも琵琶湖の水運と漁業、さらには農業の繁栄を祈念したものでしょう。しかし、『昇降龍』の鋳り金具の豪華さ、華やかさ、曳山まつりの曳山自体の洗練された美しさを見るにつけ、町衆が『美』を競い楽しみ、いわば現世を謳歌する発想だという気がしてきます。つまり、



中島さんは言います。曳山（ことぶきやま）の前柱を見てください。ここに「昇降龍」の意匠の鋳り金具がついています。昇降龍は雨を呼ぶもの、つまり五穀豊穡を祈念したものであるのは確かです。また「狸々丸（しやうじやうまる）」は、曳山全体が船の形をしていて、水神をまつったものだと思いますが、これも琵琶湖の水運と漁業、さらには農業の繁栄を祈念したものでしょう。しかし、『昇降龍』の鋳り金具の豪華さ、華やかさ、曳山まつりの曳山自体の洗練された美しさを見るにつけ、町衆が『美』を競い楽しみ、いわば現世を謳歌する発想だという気がしてきます。つまり、